様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ４ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７００１０

研究課題名（和文）哲学的当事者研究：身体障害者のための自助プログラムの構築

研究課題名（英文）The Philosophical Self-Directed Research: Constructing Self-Help Programs for People with Physical Disabilities

研究代表者
稲原　美苗（INAHARA, Minae）

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：００６４５９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、（１）「疾病と障害の哲学」の研究、（２）「当事者研究」と「哲学カウンセリング」に関する研究、（３）「疾病と障害の哲学」の研究と「当事者研究」と「哲学カウンセリング」に関する研究を総合した新たな自助実践の構築、という三段階で進めてきた。
　特に、哲学カウンセリングを応用し、当事者が自らの障害を日常的に考察するだけでなく、障害がその当事者の行動や生き方にどのように影響を与えるのかということを哲学的に研究する新たな自助実践のあり方を考えた。これまで医療的にも社会福祉的にも保護の客体として位置づけられてきた障害者を社会の成員として捉え直す哲学的理論・実践、哲学的当事者研究を提起した。

研究成果の概要（英文）：This project conducted in three stages: (1) the research on philosophy of disability and disease, (2) exploration of both Self-Directed Research and Philosophical Counseling, (3) and the construction of a new self-help practice after a comprehensive research on Self-Directed Research and Philosophical Counseling.
In particular, applying philosophical counseling for self-help programs, each person with physical disability not only considers their day-to-day conditions but also sees how disability affects their own behavior and way of life. In the past, people with disabilities were treated as the object of protection by medicine and social welfare, however, the project has recaptured those with disabilities as a social being. In order to promote this way, the project developed a philosophical way of analyzing the embodied self.

研究分野：臨床哲学

キーワード：当事者研究　哲学実践　フェミニスト現象学　障害の哲学　身体論　臨床哲学

１．研究開始当初の背景

（1）精神障害と共に生きる当事者が自らの経験（主に、生きづらさ）について考察し、研究や学びとして語りだす「当事者研究」が北海道浦河町の「べてるの家」で始まり、自助プログラムとして捉えられてきた。「当事者研究」はおそらく世界に先駆けたものであり、国境を超えて海外にも影響を与えて続けている。

（2）哲学対話や哲学カウンセリングという哲学実践が徐々に研究され始まっていた。本研究を開始した時（2013 年）4 月）に、研究代表者の所属機関が東京大学大学院総合文化研究科から大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室へ異動したこともあり、哲学実践を研究する上で非常に大きな影響を与えられた。身体障害（慢性疼痛も含む）と共に生きている当事者がどのように生きづらさと向き合うのかを考えるために「当事者研究」と哲学実践との融合の可能性を探り始めた。

２．研究の目的

（1）「当事者研究」は、障害と共に生きる当事者が「苦労の主人公」として、類似した障害をもつピア（仲間）と共に自らの「生きづらさ」や「弱さ」について「研究」をすることによって、「自分を助けていく」取り組みとして考えられてきた。これに対して、本研究は、哲学カウンセリングや哲学対話を応用し、当事者が自らの障害を日常的に考察するだけでなく、障害がその当事者の行動や生き方にどのように影響を与えるのかということを哲学的に研究する新たな自助実践プログラムを構築する。

（2）その構築のプロセスによって、これまで医療的にも社会福祉的にも保護の客体として位置づけられてきた障害者を社会の成員として捉え直す哲学的理論・実践、哲学的当事者研究を提起する。

３．研究の方法

（1）本研究は、①「疾病と障害の哲学」の研究、②「当事者研究」と「哲学カウンセリング」に関する研究、③「疾病と障害の哲学」の研究と「当事者研究」と「哲学カウンセリング」に関する研究を総合した新たな自助実践の構築、という三段階で進めた。

（2）関連文献についてのサーヴェイ研究がメインとなったが、大阪大学大学院文学研究科の臨床哲学研究室で様々な哲学実践の活動にかかわる中で、当事者の「生きづらさ」や「問題」を明確にすることの重要性を痛感した。「生きづらさ」や「問題」を明らかにすることを「私たちの弱点を社会にさらすことだ」と否定的に捉えがちだが、そうではない。むしろ、「生きづらさ」や「問題」が何なのかを少しずつ明確にすることで、問題を解決へと導く糸口になる。「当事者研究」とは「生きづらさ」や「問題」を言語化し、表現し、同じような悩みを持った仲間と対話をする中で、自助実践を行っている。研究代表者は軽度の脳性まひと共に生きている当事者であり、長年、「生きづらさ」や「問題」を表現できずにいたのだが、それらを哲学的なレンズを使って解釈することによって、多角的に捉えることができ、「障害とは何か」という問いの核心に迫ることも可能になった。

（3）研究代表者の（障害当事者としての）経験を哲学的（現象学的）に考察し、自助プログラムの構築が可能かどうかを考えた。哲学という専門領域を再考すると、「問い」を問う学問領域だと考えられる。障害当事者自身が自らの「生きづらさ」や「問題」を問うことによって、本当の問題の輪郭を浮き彫りにできた。

（4）2015 年 4 月に来日していた、子どものための哲学、個人向けのカウンセリング、企業向けのコンサルティングなど、幅広く世界各地で活躍する哲学プラクティスの第一人者の一人、ヴィクトリア・チェルネンコ氏によるワークショップに参加し、その後、哲学カウンセリングの個人セッションを受けた。氏がロシアへ帰国した後も、スカイプやメールなどで学術交流を続けている。チェルネンコ氏との出会いが、「当事者研究」と「哲学カウンセリング」の融合の可能性を確実的なものにした。

４．研究成果

(1)「当事者研究」を哲学実践の一つと捉えて、身体障害者のための自助プログラムを再考することができた。「当事者研究」と「哲学カウンセリング」の両方を経験し、「問うこと」の重要性を認識した研究代表者は自らの障害の経験を哲学的（現象学的）に分析し、問題を自ら発見し、問題解決への鍵を得られるようにするための一つの方法を提起した。

(2)「哲学実践」と「当事者研究」を総合して考察し、新たな障害当事者のための自助実践を構築することを試みた。本研究は、「当事者研究」を哲学的に展開させるだけではなく、「疾病と障害の哲学」の研究を「当事者研究」と重ね合わせることで、障害当事者（特に、身体障

害とともに生きている当事者）の身体観や世界観についての思索を深められた。

（3）また、研究実施期間の 3 年間に国内外で研究発表を頻繁に行った。特に、国外での研究発表を 5 度行い、訪問先の国々（ギリシャ、オーストラリア、スウェーデン、イギリス、フィンランド、後述の業績一覧を参照）で「当事者研究」の重要性、そして、哲学実践との関係性について訴え、フロアにいた研究者や一般の人々から高い支持を得た。このようなことより、本研究は国際的にも先駆的な試みとなり、そして、哲学・倫理学の領域にとどまらず、精神医学、障害者歯科医療、認知症医療、保健学などの専門領域と関連し合う学際的・超領域的な貢献をしたことが世界的にも認められたと言って過言ではないだろう。日本語と英語の両方で多数の研究論文を発表することができた（後述の業績一覧を参照）ものの、本研究の申請書に書かれていたことが十分に実現できなかったことは、遺憾である。申請当時、海外学術雑誌から研究論文を出版する予定であったが、未だ出せておらず、現段階では、2 つの雑誌で査読待ちの状態である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8 件）

① 稲原　美苗、能力・障害のパフォーマティヴィティ―ジュディス・バトラーのジェンダー論から再考するアビリティ―、UTCP-上廣ブックレット 12―共生のための障害の哲学 2―、査読なし（招待）、2016、29－46

② 稲原　美苗、フェミニスト現象学とその応用―つながりの「知」への展開、理想、査読なし（招待）、695 号、2015、120－132

③ 稲原　美苗、フェミニスト現象学における障害の身体論の展開―哲学的当事者研究の可能性、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読なし、55 巻、2015、1－18
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/55447

④ INAHARA, Minae、Between Bodies: Rethinking Physical Disability through the Concepts of Abjection and Ressentiment、メタフュシカ、査読なし、45 号、2014、25－38
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/51539

⑤ INAHARA, Minae、 The Disabled Body, the Able-bodied Form: A Feminist Exploration of Dialogue between Beauvoir and Fanon、待兼山論叢（哲学篇）、査読有、47 号、2013、1－17
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/54396

⑥ INAHARA, Minae、The Sound of Pain : Embodied Subjectivity and Onomatopoeic Expressions in Japanese、臨床哲学、査読有、15 号（1）、2013、55－69
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/26328

⑦ 稲原　美苗、障害とアブジェクシオン：「受容」と「拒絶」の狭間、UTCP-上廣ブックレット 2―共生のための障害の哲学：身体・語り・共同性をめぐって―、査読なし、2013、11－25
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55479
PECKITT, Michael Gillan、INAHARA, Minae、COLE, Jonathan、Between Two Worlds : A Phenomenological Critique of the Medical and Social Models of Disability、UTCP-上廣ブックレット 2―共生のための障害の哲学：身体・語り・共同性をめぐって―、査読なし、2013、139－153
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55486

〔学会発表〕（計 14 件）

① INAHARA, Minae、The Art of Pain and Intersubjectivity in Frida、Kahlo's Self Portraits、Dialogue and Intersubjectivity: An Interdisciplinary Workshop、2015.9.16、 ヘルシンキ大学（フィンランド）

② INAHARA, Minae、Healing Art for Self-Expression of Psychiatric Patients in Tokyo、Hull Medical Humanities Seminar Series Spring, 2015 The Body, Health, Wellbeing, and Vulnerability、2015.2.17、 ハル大学（イギリス）

③ 稲原　美苗、能力・障害のパフォーマティヴィティ：ジュディス・バトラーのジェンダー論から再考するアビリティ、東京大学大学院総合文化研究科附属「共生のための国際哲学研究センター（UTCP）」研究会、2015.1.24、東京大学（東京都）

④ INAHARA, Minae、Exploring the Situated Knowledge of (disability) in Feminist Standpoint Theory and Tojisha-Kenkyu、東京大学大学院（HIS）「科学と共生社会のための哲学の検討」シンポジウム、2014.12.20、東京大学（東京都）

⑤ 稲原　美苗、フェミニスト現象学とその

応用―つながりの「知」への展開、日本現象学会第36回研究大会、2014.11.30、東洋大学（東京都）

⑥ INAHARA, Minae、The Sense of the Lost Home for Individuals with Dementia: Chora and Ambiguous Self、International conference in Norrköping "Life with Dementia: Relations"、2014.10.15、リンショーピン大学（スウェーデン）.

⑦ 稲原　美苗、健常者のマトリックス：認識可能なアビリティと認識不可能なアビリティ、第 35 回臨床哲学研究会、2014,9.5、大阪大学（大阪府）

⑧ 文元　基宝、稲原　美苗、当事者研究の見地から探る歯科医療―行動変容から自己変容へ―、第 23 回日本健康教育学会学術大会、2014,7.12、札幌市教育文化会館（北海道）

⑨ 稲原　美苗、フェミニスト現象学の見地から考える身体障害とその経験―哲学的当事者研究の可能性、日本大学人文科学研究所 哲学ワークショップ　第 5 回 「フェミニスト現象学」、2014.3.5、日本大学（東京都）

⑩ INAHARA, Minae、A Manifesto for Ability Studies: Exploring Tojisha-Kenkyu and Disability、ニューイングランド大学保健学部セミナー、2014.2.17、ニューイングランド大学（オーストラリア）

⑪ 稲原　美苗、 文元　基宝、歯科医療の中の当事者研究―専門知と当事者の知をつないで―、第 33 回臨床哲学研究会、2013.12.7、大阪大学（大阪府）

⑫ 稲原　美苗、障害当事者から観た『ピノキオ』：スペクテイターシップと語り、第 4 回ナラティヴと質的研究会「病いの語りと当事者性」、2013.10.27、大阪大学（大阪府）

⑬ INAHARA, Minae、The Disabled Body, The Able-bodied Form: A feminist exploration of dialogue between Fanon and Beauvoir、23rd World Congress of Philosophy、2013.8.8、アテネ大学（ギリシャ）

⑭ 稲原　美苗、障害のある身体、健常な形：ファノンとボーヴォワールの対話についてのフェミニズム的探求、最先端ときめき研究推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第 40 回ときめきセミナー、2013.7.13、大阪大学（大阪府）

〔図書〕（計　0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
稲原　美苗　（INAHARA, Minae）
大阪大学・大学院文学研究科　助教
研究者番号：00645997